

国内における貼付剤の実態調査に関する文献検討

○福田 真佑¹, 日下 真咲代¹, 赤瀬 智子¹ (横浜市大)

【目的】臨床現場での患者の持参薬調査において、患者は貼付剤を治療薬として認識していない傾向があったことから、患者は貼付剤の使い方や貼り方について留意していない可能性があると考えた。そこで、貼付剤を使用する患者の現状や課題を明らかにする目的で、国内における貼付剤の実態調査に関する文献検討を行った。

【方法】医学中央雑誌（医中誌）Web版 Ver. 5 において、キーワード「貼付剤」「経皮吸収型製剤」「実態」を用いて文献検索を行った。該当した論文のうち、貼付剤に関する内容と断定できない論文を除外した 30 文献を分析対象として抽出・精読し、詳細に検討した。

【結果】調査対象になっていた貼付剤の内訳は局所作用型製剤 12 件、全身作用型製剤 10 件、記載なしは 8 件で、貼付剤の実態調査の内容は「副作用」、「オピオイドローテーション」、「患者の貼付剤使用」、「効果」、「その他」に分類された。内容を検討した結果、以下の知見を得た。(1) オピオイドローテーション、貼付剤の効果や副作用など、医療者による貼付剤の使用に関する報告が多かった。(2) 副作用の調査場所の大半は在宅だった。副作用の多くは皮膚症状で、皮膚症状が生じた対象者の半数が局所作用型製剤を使用していた。(3) 患者は服薬指導を十分に受けておらず、貼付剤に関する知識が不足していた。(4) 患者の貼付剤の使い方に着目した研究や、全貼付剤を対象とした使用実態調査の報告はなかった。以上より、患者にとって身近な医療者である看護師が、患者の貼付剤の使い方や貼り方を調査し、貼付剤の効果や副作用について患者の背景や生活状況を踏まえながら、他の医療者と情報共有していく必要性が示唆された。